

2014年9月吉日

六つの個展 「2人は、ニュー・アート」シリーズⅡ

具体人 in Karuizawa

一般財団法人 Karuizawa New Art Museum

軽井沢ニューアートミュージアムでは、これまで「世界に通用する日本のアート」を新しい視点から“New Art”として再領域化し、世界に発信することを目標として活動を行ってきました。今回はパフォーマンスアートやハプニング、インスタレーションという分野の先駆者として今日の現代アートの礎を築き、国内外の様々なアーティストに影響を与えた前衛芸術グループ“具体美術協会”に焦点を当てます。

具体美術協会は伝統ある日本美術界へ果敢な挑戦をし、60年代に世界のアートシーンへの進出を果たして、戦後日本美術の重要なムーブメントとなりました。近年では国立新美術館(東京)やグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)において大規模な回顧展が開催されるなど、具体美術は日本を代表する前衛芸術運動のひとつとして国際的に再評価されています。

これまで具体美術協会の展覧会は1954年の協会設立から1972年の解散に至るまでの期間に焦点が当てられ、その期間に制作された作品に特化したグループ展として開催されるケースが大部分を占めていました。しかし、吉原治良の提唱した具体美術宣言の言葉である「他人のまねをするな」の実践に尽くしてきた作家たちは、具体美術協会が解散した後も独自に活動を続けてきました。

本展覧会では同協会に所属した各アーティストたちが、吉原治良と共に歩んだ1954年から1972年までの具体美術協会の時代と、各個人が一人の前衛芸術家として活躍した具体解散後から現代までの作品を合わせて展示します。「具体」の精神を受け継いだ前衛芸術家たち、すなわち“具体人”たちの創造の発見と発明、そしてその実践により生み出された表現の軌跡、生涯にわたる制作活動を個展のかたちで順次紹介します。具体の精神と独自の理論の融合による洗練されたタブローや、自らの肉体や予想外の道具を駆使したアクションの痕跡など、これぞ“日本の現代アートの原点”と呼べる作品を体感していただけます。

具体美術協会

吉原治良をリーダーとして、1954年に芦屋で結成された「具体美術協会」は吉原の「人のまねをするな」との指導のもとで、活動を行ってきました。機関誌『具体』の出版や、大阪・中之島に誕生したグタイピナコテカを活用し、日本の前衛芸術を国内のみならず世界に発信しました。

具体美術の特徴である斬新な抽象絵画や、体を張ったパフォーマンス、吉原の行った画期的なアートマネージメントにはアンフォルメルの提唱者であるフランス人美術批評家ミシェル・タピエをはじめ、アメリカの美術界を代表するジャスパー・ジョーンズやサム・フランシス、イサム・ノグチらも注目し、交流を持ちました。

1972年、吉原治良の死去とともに解散した具体美術協会ではありましたが、在籍した各会員たちは「具体の精神」を受け継ぎ個々の活動を続けてきました。嶋本昭三(1928 - 2013)や白髪一雄(1924 - 2008)ら、初期の具体を支えたメンバーを中心に世界的な活躍をみせ、近年では国立新美術館やグッゲンハイム美術館で大規模な回顧展が開催されています。日本の戦後美術を代表する芸術運動であり、世界に通用する前衛芸術家集団として再び具体美術協会が注目を集めています。

グタイピナコテカ

1962年（昭和37）に大阪中之島に存在した明治時代の土蔵を改修した展示施設です。

「ピナコテカ」とは「絵画館」や「画廊」を意味する言葉であり、アンフォルメルの提唱者でもあるフランス人美術批評家のミシェル・タピエが命名しました。この展示場において、具体美術展や会員の個展、具体美術小品展、具体新人美術展などが定期的開催されるなど、具体美術協会の活動拠点となりました。ルーチョ・フォンタナやサム・フランシスら新進の海外作家の展覧会も行われ、現代美術の動向を示す場としての注目度も高かったとされています。ジャスパー・ジョーンズ、イサム・ノグチ、オノ・ヨーコなどの美術家や、音楽家のジョン・ケージなど、海外の著名な美術関係者も訪問し、活発な交流が行われていました。

グタイピナコテカは1970年（昭和45）4月に、阪神高速道路出入口建設のため閉館し、取り壊されました。翌年10月にグタイミニピナコテカを新たに開設し、活動を継続しました。

「具体美術協会」略歴

- 1954 年（昭和 29） 「具体美術協会」結成。
- 1955 年（昭和 30） 機関誌『具体』創刊。（以後、1965 年の第 14 号まで刊行）
東京の小原会館で第 1 回具体美術展を開催。
- 1956 年（昭和 31） 『芸術新潮』12 月号の誌上で吉原治良が「具体美術宣言」を発表。
- 1957 年（昭和 32） ミシェル・タピエが来阪、「具体」と親交を結ぶ
- 1958 年（昭和 33） ニューヨークのマーサ・ジャクソン画廊で、「具体」グループ展を開催。
（以後、全米各地を巡回）
- 1959 年（昭和 34） イタリアでグループ展を開催。
（ノティツィエ=アルティ・フィギュラティヴィ画廊・トリノ）
- 1960 年（昭和 35） 大阪・なんば高島屋の屋上でアドバルーンを使ったアンフォルメル
の国際展「国際スカイフェスティバル」を主催。
- 1962 年（昭和 37） 大阪中之島にグタイピナコテカを開設。
- 1965 年（昭和 40） パリのスタドラー画廊で「パリ具体美術展」を開催。
（ドイツのケルン、オランダのルーネルスロートを巡回）
- 1966 年（昭和 41） 第 2 回ローザンヌ国際画商展（州立美術館・スイス）にグタイピナコ
テカが招待され、会員全員が出品。
- 1967 年（昭和 42） 「具体」に神戸新聞平和賞（文化賞）が授与される。
オーストリアでのグループ展が開催。
（ハイデ・ヒルデブランド画廊・クラゲンフルト）
- 1970 年（昭和 45） 大阪の日本万国博覧会に具体で参加。
お祭り広場における「具体美術まつり」の開催。
- 1971 年（昭和 46） 大阪中之島にグタイミニピナコテカを開館。
- 1972 年（昭和 47） 2 月 10 日吉原治良が死去、3 月末日具体美術協会解散。
- 2004 年（平成 16） 『具体』回顧展」が兵庫県立美術館で開催。
- 2012 年（平成 24） 回顧展『具体』ーニッポンの前衛 18 年の軌跡」が国立新美術館で開催。
- 2013 年（平成 25） ニューヨークのグッゲンハイム美術館で回顧展
「具体：素晴らしい遊び場 Gutai: Splendid Playground」開催。

吉原治良展まる一円の意味

吉原治良 (1905—1972)

【2014年10月1日(水)～12月25日(木)】

吉原治良は大胆で独創的なアクションが目立つ「具体美術協会」の中で一貫してタブロー制作に徹した。吉原作品については、1960年以後の「円」の絵画が国際的に高く評価されているが、なぜ「円」なのか。洋の東西をとわず、円は歴大なシンボルのなかでも最も広範に分布し、古くから太陽や月を意味した。また円は完全性や永遠性を象徴し、さまざまな宗教とも関連して多様な意味を伴った。しかし吉原にとってはあまり深い意味はなく、1967年の東京画廊における個展において「便利だから」円を描くにすぎないと書いている。吉原は「円」を対象の具現化や抽象化とは全く異なる何の意味もない記号として捉えた。本展では歴大な吉原作品の中から特に「円(マル)」の作品を中心に展観し、その意味を考える。



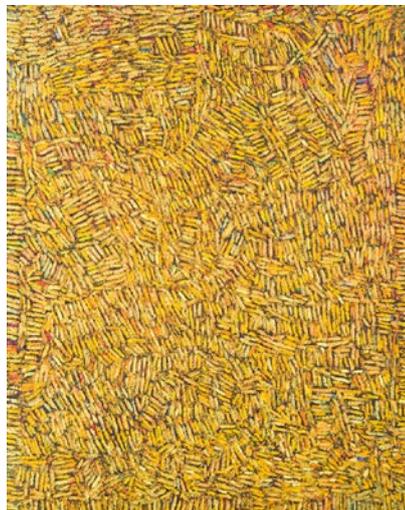
《円》 1971年 45.5×53.0 油彩・カンヴァス

上前智祐展一タブローの中の宇宙

上前智祐 (1920—)

【2014年10月1日(水)～12月25日(木)】

上前智祐は94歳になる今日も精力的に制作活動が続けている。具体美術協会が発足する1954年の2年前から吉原治良に私淑し、1972年3月に同協会が解散するまで、18年間にわたり、吉原の薫陶を受け続けた。「具体」の初期メンバーの中で村上三郎、白髪一雄、田中敦子、嶋本昭三らが、アクションやパフォーマンスで華々しくデビューしたのに比して、上前はタブローに克明にペイントする手法を固守し(マッチ棒や油絵具以外の材料を使うこともあった)、その制作スタイルを終生変えることがなかった。上前の作品は60年代から海外展にたびたび出品しているが、本格的な国際的評価はここ数年来のことである。上前芸術の真価が半世紀を経過してやっと世界に認知されつつある。本展では上前の「具体」時代の作品を中心に最近作まで、平面作品から立体まで約20点を展観する。



《無題》1966年 15号 油彩・カンヴァス

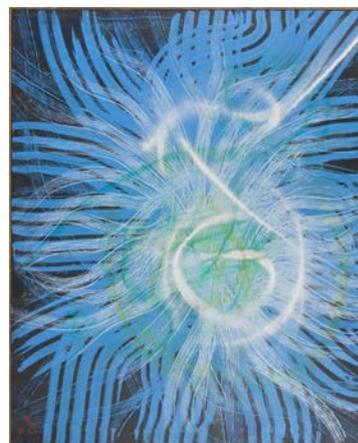
鷺見康夫展—ちゃらんぼらん精神

鷺見康夫 (1925—)

【2014年10月1日(水)～2015年6月22日(月)】

1925年に大阪で生まれた鷺見康夫は、1954年に勤務先の中学校の同僚であり、後に同じ具体作家となる嶋本昭三からの勧めで、絵を描きはじめた。その後独学で美術を学び、第七回芦屋市展に出品した際、自由奔放な作風が吉原治良の目に留まり1955年に具体メンバーに加わることとなる。鷺見康夫は、そろばんや楯、パイプレーター、番傘といった奇抜な道具を画材として駆使し、自らの人生哲学に則った作品制作を行っている。

その画業は、1956年に吉原治良が提唱した具体美術宣言にある『物質と精神の握手』を実践するものであると言え、まさに具体の精神を全身全霊で表現している。鷺見は、自らの信条として「やけくそ・ふまじめ・ちゃらんぼらん」と掲げ「人間の本来の姿」で半世紀以上に渡り制作を続けている。本展では実際の作品制作に使用された“そろばん”を実物展示し、行動の痕跡や道具の軌道を、よりリアルに体感できる。



《作品 SY-14》1988年 162.0×130.6
油彩・ラッカースプレー・カンヴァス

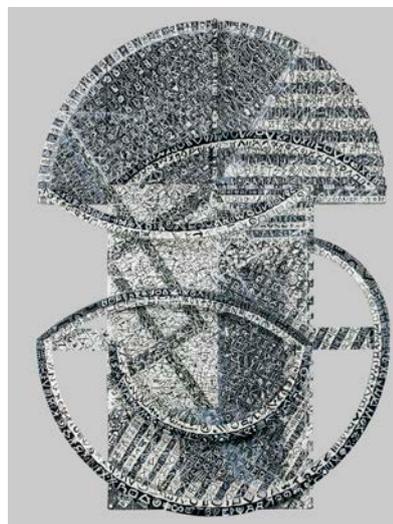
向井修二展—増殖する森羅万象記号

向井修二 (1940—)

【2014年10月1日(水)～2015年6月22日(月)】

1940年神戸に生まれた向井修二は、大阪美術学校(現・大阪芸術大学)在学中に具体メンバーの元永定正に出会い、19歳で第8回具体美術展に出品。1961年具体美術協会の会員となり、解散まで在籍した。松谷武判や前川強とともに「3M」と呼ばれ、具体の第2世代として活躍、グタイピナコテカでも次世代初の作家として個展を開催した。絵画や空間に○×△等の様々な記号を無数に配置した作品群は、具体のリーダー吉原治良に「一見クールに見えながら猛烈なエネルギーを内在する」と評され、ミシェル・タピエからも高い評価を得る。

2013年ニューヨークのグッゲンハイム美術館で開催された具体展では、第8回具体美術展に出品した《記号の部屋》を発展させ、館内のトイレやエレベーターを記号で埋め尽くすインスタレーション作品を発表した。昨今の現代美術では当たり前のように目にするインスタレーション作品だが、向井は半世紀前の具体の時代から意識的に環境芸術を行っていた。本展覧会においても展示室内をはじめトイレや応接セット、立体オブジェに記号のインスタレーションを施し、一大記号空間を作り上げる。



《WORK No. 12》1993年
199.0 × 140.0 アクリル・エナメル・板

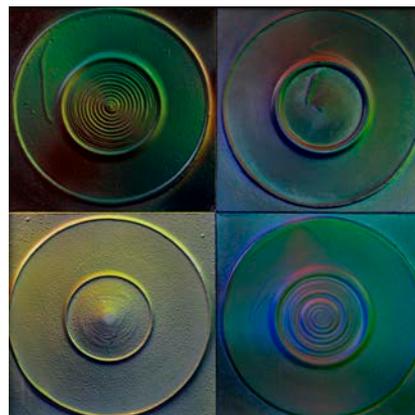
名坂有子展—同心円の無限空間

名坂有子（1938—）

【2014年11月5日（水）～2015年6月22日（月）】

名坂有子は、1938年に大阪で生まれる。1962年の第15回芦屋市展で、ダンボールにドリルで無数の穴をあけた作品を出展したことがきっかけとなり、具体の創設者である吉原治良に師事することとなった。翌1963年に具体会員となり、1972年の解散までの9年間、具体美術協会に在籍した。

名坂は具体の全盛期である60年代から現在まで、一貫して同心円のレリーフ状の作品を制作し続けてきた。回転板と樹脂を用いて描画した同心円のモチーフを繋ぎ合わせることで、壁全体を覆い尽くすかのような巨大な作品として仕上げる。同一モチーフの反復と集積を強調することで、無限の空間表現を可能とし、鑑賞者はどこまでも広がる絵画空間を感じさせられる。そして、この「空間表現」こそが名坂有子の独自性であり、縦横、奥行きに時間をも加えた四次元空間を制作フィールドとして捉えているという点が他の具体作家と一線を画する要因となっている。



《∞・・・4PIECES》1963年 60.0×60.0
樹脂・ラッカー・板

名坂千吉郎展—融解する色彩感覚

名坂千吉郎（1923—）

【2014年11月5日（水）～2015年6月22日（月）】

1923年大阪に生まれた名坂千吉郎は、中之島洋画研究所や川端画学校で絵画を学び、1942年に京都市立絵画専門学校に入学。この頃の同期に具体メンバーとして活躍する白髪一雄がいる。1965年に第15回具体美術展に出品し、具体会員となる。具体解散まで在籍し、具体展にも連続出品を果たす。

初期は、アンフォルメルから影響を受けたような絵画作品を発表していたが、ハードエッジやライト・アート、キネティックアートと具体後期を特徴づけるテクノロジーを駆使した作風へ移行していく。特に鉄をつなぎ合わせ鋭い角度がついた平面作品は、他の具体作家の熱い抽象画とは異なる。

2013年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で開かれた具体回顧展「具体：素晴らしい遊び場 Gutai: Splendid Playground」では、螺旋状に円を描くように登っていく展示室にアルミパイプをつなぎ合わせたインスタレーションを再現した。吉原治良の円の作品をはじめ、他の具体作家の平面作品と呼応するように展示された。このように「環境芸術」の分野でも活躍し、具体以外の「環境芸術」と関連したグループ展にも積極的に参加した。



《作品》1978年 72.5×52.5
ミクストメディア・板

来年の入れ替え作家予定

前川強 (1936—)

1936年に大阪市で生まれる。1962年に具体美術協会会員となる。松谷、向井と共に『3M』と呼ばれ具体第二世代の中心として活躍した。ドンゴロス(麻布)を貼り付け、切り裂き、縫い合わせることで凸凹のレリーフ状の物質的絵画を制作する前川は、抽象表現主義の傾向の強い具体の中において、“もの”の物質性に着目した。

松谷武判 (1937—)

1937年大阪に生まれる。1963年具体美術協会会員となり、向井、前川と共に『3M』と呼ばれ具体第二世代の中心として活躍した。1960年代初頭より、当時新素材として市場に出回り始めた木工用ボンドを使い、艶やかで粘りのあるその素材の質感と丸く膨らんだフォームで独自のスタイルを築いた表現が特徴である。

嶋本昭三 (1928—2013)

1928年に大阪で生まれる。1954年に具体美術協会の結成に参加し、以後中心メンバーとして活躍する。ビン詰めした絵の具を画面上で炸裂させる「ビン投げ」や、紙のキャンバスに穴を開けた作品など、従来の美術の概念を越えた創作やパフォーマンス活動を展開した。世界各国でパフォーマンスを行い、日本美術界の国際化への道を開くことに尽力した。

吉田稔郎 (1928—1997)

1928年に神戸市で生まれる。1952年から吉原治良に師事し、具体美術協会結成から会員となる。初期には空気銃を使って画面に穴を開けたり、画面を焦がしたり絵筆を使用しない表現を試みる。洗剤を入れたフラスコから縦横無尽に泡が溢れる作品を1965年の第15回具体美術展に出品し、代表作となる。

吉原通雄 (1933—1996)

1933年芦屋市に生まれる。1954年に父、吉原治良が代表を務める具体美術協会の結成に参加する。多岐にわたる素材・技法の実験を経て、コールタールを流し、砂や小石を撒くという手法を確立し「大地」をテーマとした制作を行う。1962年以降は鮮やかな色彩の紙テープやリボン、蛍光管を用いるライト・アートなどスタイルを一変した。

白髪一雄（1924－2008）

1924年兵庫県尼崎市に生まれる。1952年にO会結成を経て、1955年に具体美術協会会員となる。ロープにぶら下がって滑走しながら裸足で絵の具を押し広げるフットペインティングは白髪の代名詞であり、晩年までこの手法を貫いた。自ら絵画の中に入り込み、絵の具と闘うようなアクションが世界的に注目を集めた。

元永定正（1922－2011）

1922年三重県に生まれる。1955年に具体美術協会会員となる。ドリッピング(飛沫)やポアリング(注ぎ描き)によるアンフォルメル画家として知られ、偶然の効果と緻密な計算による絵画を発表した。のちにユーモラスで楽天的な画風を強め、温かみのある抽象画を展開する。絵画のみならず、版画や絵本と幅広い領域で活躍した。

村上三郎（1925－1996）

1925年神戸市生まれ。1955年に具体美術協会会員になり、解散まで在籍した。具体の初期メンバーとして活躍し、「無言」や「箱」など様々な時間や人間の身体を表現したパフォーマンスを発表。クラフト紙を木枠に貼り、体当たりで突き破る代表作「紙破り」はパフォーマンスの先駆として海外でも評価される。

田中敦子（1932－2005）

1932年大阪市に生まれる。1955年具体美術協会会員となる。9色の合成エナメル塗料で塗り分けられた管球約100個と電球80個からなる《電気服》（1956）で注目を集めた。また、それをベースに描かれた円と線から構成された絵画群は具体のなかでも異彩を放っている。

金山明（1924－2006）

1924年大阪生まれ。1952年にO会結成に参加し、1955年に具体美術協会会員となる。（1965年退会）グリッドや幾何学模様を用いた空間や配置、構図を意識させる作品を制作した。また、後期には、ペンや絵の具入りの缶を付けた電気自動車を走らせるという独創的な描画方法を行った。

松田豊（1942－1998）

1942年に大阪市に生まれる。1966年に第10回シェル賞の佳作賞を受賞する。翌年1967年に具体会員となる。具体後期に目立ち始めたキネティックアート作品を制作。シンプルな色彩と形態だけで構成した画面から単純で明快な動きが生まれ、鑑賞者をその動きとそこから発する振動や音に引き込む。

開催情報

- ◇展覧会名 六つの個展「2人は、ニュー・アート」シリーズⅡ
具体人 in Karuizawa
- ◇会 期 2014年10月1日(水)～2015年9月23日(水)
会期中随時展示替をしていきます。
- ◇会 場 Karuizawa New Art Museum 第1～6展示室(2階)
〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢 1151-5
- ◇開館時間 10月～3月：午前11時～午後5時
4月～6月：午前10時～午後5時
7月～9月：午前10時～午後6時
※入館は閉館30分前まで
- ◇休 館 日 毎週火曜日 ※火曜日が祝日の場合、翌日休館・8月無休
- ◇観 覧 料 一般：1500円、65歳以上・高大生：1200円、小中生：700円
※20名以上の団体で来館の場合、上記各観覧料の200円引き
※未就学児無料、障がい者割引あり(上記各観覧料の半額)
- ◇企画・主催 一般財団法人 Karuizawa New Art Museum
- ◇監 修 木村重信、村田慶之輔、千足伸行、本江邦夫、伊東順二
- ◇後 援 長野県、長野県教育委員会、軽井沢町、信濃毎日新聞社、上毛新聞社、SBC
信越放送、NBS長野放送、TSBテレビ信州、abn長野朝日放送、軽井沢新聞
社、軽井沢ニュース舎、FM軽井沢、KIAC(軽井沢国際芸術文化都市推進協
議会)
- ◇出品作家 吉原治良、上前智祐、鷺見康夫、向井修二、名坂有子、名坂千吉郎、嶋本昭
三、吉田稔郎、吉原通雄、白髪一雄、元永定正、村上三郎、田中敦子、金山
明、松谷武判、前川強、松田豊(開催順)



関連情報

【関連イベント・プログラム】

◇トークショー

◇ワークショップ

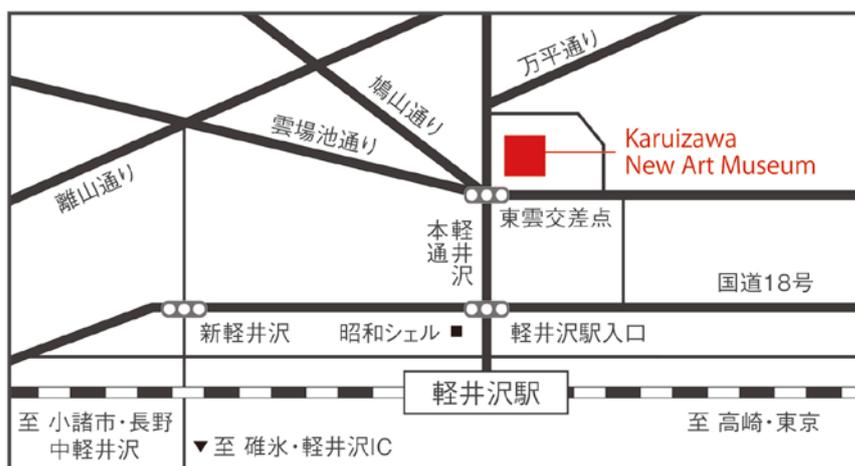
◇学芸員によるギャラリートーク

※上記以外にも様々なイベント・プログラムを開催予定です。

詳細は、後日当館 HP にて告知いたします。

【交通案内】

JR 東日本・しなの鉄道「軽井沢駅」から徒歩 8 分



※駐車場完備（乗用車 25 台・大型バス 4 台駐車可）

【プレス画像】

本展広報用として、吉原治良の作品画像 1 点の作品画像がございます。

掲載ご希望の方は別紙 FAX シートにて、ご希望の作品番号をお知らせください。

【お問い合わせ先】

Karuizawa New Art Museum（軽井沢ニューアートミュージアム）

TEL: 0267-46-8691 / FAX: 0267-46-8692

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢 1151-5

pr@knam.jp

（学芸員 鈴木一史）

広報用画像申込書

六つの個展 「2人は、ニュー・アート」シリーズⅡ

具体人 in Karuizawa

一般財団法人 Karuizawa New Art Museum 広報課宛

FAX: 0267-46-8692 / E-mail: pr@knam.jp

本展覧会広報用素材として、吉原治良の作品画像1点をご用意しております。
ご希望の際は下記申込用紙に必要事項を全てご記入の上、ファックス又はEメールにてお申込みください。なお、写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。

① キャプションは、作家名、作品名、制作年を必ず表記ください。

② 作品のトリミング、文字載せは禁止とさせていただきます。

※本展記事を紹介頂く場合には、恐れ入りますが情報確認の為に校正、掲載誌(紙)、DVD、CD等をお送りください。

媒体名：	種別： <input type="checkbox"/> テレビ <input type="checkbox"/> ラジオ <input type="checkbox"/> 新聞 <input type="checkbox"/> 雑誌 <input type="checkbox"/> フリーペーパー <input type="checkbox"/> ネット媒体 <input type="checkbox"/> 携帯媒体 <input type="checkbox"/> その他 ()	発売・放送予定日： 年 月 日
御社名：	ご担当者名：	電話番号：
FAX 番号：	ご住所：	メールアドレス： @



《 円 》
吉原治良
1971年
45.5×53.0
油彩・カンヴァス